

平成 30 年 5 月 5 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26284025

研究課題名(和文) 中世ロシア聖堂壁画に見るバルカン半島の影響

研究課題名(英文) Aspects of the Influences of the Balkan Peninsula in the Medieval Russian Wall Paintings

研究代表者

益田 朋幸 (Masuda, Tomoyuki)

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：70257236

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,200,000円

研究成果の概要(和文)：ロシア、ジョージアの中世壁画をもつ聖堂の現地調査を行い、聖堂装飾プログラムの分析を試みた。過去の調査で蓄積のあるバルカン半島(ギリシア、マケドニア、セルビア、コソヴォ、アルバニア)の諸聖堂のデータを比較し、バルカン半島が中世ロシア文化圏に与えた影響を具体的に分析した。その結果、ロシアの装飾プログラムの特異性がいくつか浮かび上がり、またロシアがバルカンに与えた想定できる事象も明らかになった。

バルカンの図像はテオファニス(フェオファン・グレク)やマヌイル・エウゲニコス経由で、ルブリョーフらによってロシアの地に定着し、ディオニシの装飾プログラムにまで継承されてゆく。

研究成果の概要(英文)：We made a survey of the medieval churches with wall paintings in Russia and Georgia, and analyzed their decoration program. Comparing with churches in the Balkan peninsula (Greece, Macedonia, Serbia, Kosovo and Albania), on which we have researched in the previous surveys, we analyzed in detail the aspects of influences of the Balkan peninsula to the medieval Russian cultural areas.

As a result, some unqiuties in the Russian church decoration have been defined, and on the contrary, a few phenomena that Russia was operative to the Balkan peninsula was demonstrated.

Balkan iconographies was, via the hands of Theophanes (Feofan Grek) or Manuel Eugenikos, made root by Andrei Rublev and others in the land of Russia, and they were succeeded to the decoration program of Dionisi.

研究分野：西洋美術史

キーワード：ビザンティン美術 中世ロシア美術 聖堂装飾プログラム キリスト教図像学 中世ジョージア美術
イコン

1. 研究開始当初の背景

(1)平成 22～24 年度の科研基盤研究(B)「バルカン半島中部における文化的多様性の歴史的研究」(代表益田)によって、バルカン諸国(ギリシア、マケドニア、セルビア、コソヴォ、アルバニア)のビザンティン聖堂壁画の調査を行い、12～14 世紀の聖堂装飾プログラムに関して一定の知見を得た。その過程において、ロシア文化圏(ウクライナ、ジョージアを含む)の図像との関連を多く見出すこととなった。

(2)また代表者は平成 25 年度科研研究成果公開促進(学術図書)によって、これまでの研究成果の集大成とも言える著書『ビザンティン聖堂装飾プログラム論』(中央公論美術出版、2014 年)を刊行し、広くビザンティン帝国とその影響下にあった国々の聖堂装飾プログラムを検討した。これらが本研究を構想する背景となっている。

(3)代表者の問題意識の一つは、「ビザンティンにおける中央と辺境」である。ビザンティン帝国において圧倒的に影響力を有していたのは、首都コンスタンティノポリスであることは誰も認めるところである。しかし帝国が 15 世紀にオスマン・トルコに滅亡させられたことによって、首都(現在のイスタンブール)にはほとんど作例が残っていない。

しかしビザンティンの辺境とも呼ぶべき周縁地域に、首都の古い図像やプログラムが残っている可能性があることに、調査の中で気づかされた。カッパドキア、南イタリア、ロシアといった地域がそれに該当する。本研究では時間的人的制約の中で、最も効率のよいと考えられるロシア周辺を対象として選定した。

2. 研究の目的

(1)ビザンティン帝国とロシアとの間には、画家の交流が記録されている。11 世紀のキエフには、大規模なビザンティンのモザイク・フレスコ工房が渡って、長期間仕事をしているし、14 世紀後半には首都コンスタンティノポリスの画家テオファニスやマヌイル・エウゲニコスがロシア、ジョージアに赴いて壁画制作を行い、現地で弟子を育てた。

(2)しかしビザンティンの首都コンスタンティノポリスには、トルコ支配のために聖堂壁画がほとんど残っていない。代わりに豊かな作例を残すのは、バルカン諸国の聖堂・修道院である。バルカン諸国の聖堂壁画と、ロシア文化圏のそれを比較することによって、ビザンティンがロシアに及ぼした影響を具体的に指摘したい。

3. 研究の方法

(1)これまでのキリスト教図像学研究は、「受胎告知」「磔刑」といった各図像の細部をテキストや典礼と関連づけて解釈するものであった。しかしビザンティンの聖堂壁画は、床を除く壁面すべてをフレスコやモザイ

クで覆い、三次元性の中で「神の世界」を実現しようとするものである。単独の場面を議論するのみでは、聖堂装飾の全体像を描くことができないのである。

(2)代表者が提唱する方法論は「対照性」に基づくプログラム解釈である。図像は上下・左右・対面に関連づけられることによって、単独の図像では持ち得ない、メタレヴェルの意味を創出する。この方法論に基づいて、単独図像ではなく、聖堂壁画全体を比較することによって、影響の深さを測定し得る。

(3)聖堂装飾プログラムを記述するためには、多数の写真だけでは十分でない。ヴァーティカル・パースペクティブ図による図像配置が、現状最も能率的であるが、作図に費用と技術が必要である。当面は高感度カメラと超広角レンズによる撮影によって、ヴァーティカル・パースペクティブ図の代替とすることとした。



超広角レンズ、高感度による撮影データ
(オフリドのパナギア・ペリプレプトス
聖堂)

4. 研究成果

(1)当初の計画のうち、ウクライナは政治情勢悪化のために調査を断念したが、ジョージアに 2 ヶ年、ロシアに 2 ヶ年の現地調査を行った。幸い各地正教会主教座・総主教座の協力が得られて、こちらが希望した聖堂・修道院の撮影を行うことができた。したがって研究成果の第一は、ロシア、ジョージアの 12～14 世紀の壁画を有するほとんどのモニュメントのデータを獲得したことにある。

例外はジョージアのスヴァネティ地方(高地コーカサス)の村々に点在する小聖堂群で、ジョージア総主教座の管轄下になく、悉皆調査がかなわなかった。またジョージアのダヴィド・ガレジ岩窟修道院のうち、13 世紀のフレスコをもつベルトゥパニは現在アゼルバイジャン領にあり、ジョージアの許可が通用せずに訪問できなかった。

これらの写真は論文、書籍によって順次公開してゆく。インターネットによる公開は許可されていないので、ネットのデータベースは聖堂外観写真に限定せざるを得ない。

(2)聖堂装飾プログラムに関しては、多くの新知見を得ることができた。それらは論文

の形で既に公開してきたし、今後もその作業は継続される。とりわけロシア側の知見を活かして、バルカンの作例に新たな光を当てることができた。集中的に成果を発表したのは、オフリド(マケドニア)のパナギア・ペリブレプトス聖堂(1294/94年創建)である(雑誌論文)。この聖堂壁画に関しては、さらに論文を書き進めて、英語のモノグラフを刊行したい。

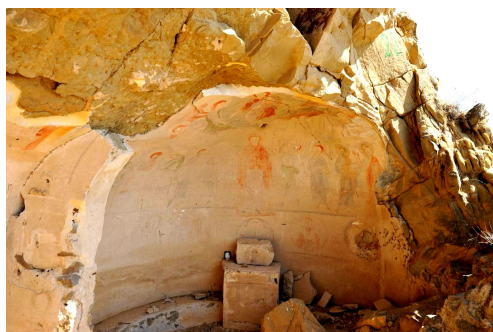
(3) 計画段階では想定しなかったことであるが、中世ロシア文化圏には、ビザンティン帝国領内に現存作例が極めて少ない聖母マリア伝サイクルの図像が豊富に存在する。11世紀としてキエフの聖ソフィア大聖堂、アテニ・シオニ聖堂(ジョージア)、12世紀の作はスタラヤ・ラドガの聖ゲオルギオス、ノヴゴロドのアルカジ受胎告知聖堂、プスコフのミロジュ修道院等を挙げることができる。

ビザンティン側に現存するのは13世紀以降が多いが、13世紀末のオフリドのパナギア・ペリブレプトス聖堂、14世紀のストゥデニツァ修道院王の聖堂(セルビア)、コーラ修道院(コンスタンティノポリス)、パナギア・ペリブレプトス聖堂(ミストラ)等と比較することによって、「ビザンティン美術における聖母マリア伝図像」の問題が浮かび上がった。その成果は雑誌論文 で公表した。

(4) ビザンティン聖堂壁画の中には、区画を超えて聖堂全体をいわば舞台として展開する図像が存在する、というのが代表者の年来の主張である。その主張を裏付ける作例を、4年間の調査でいくつか発見することができた。

聖堂アプシスに「オランス(両手を広げる祈りの仕種)の聖母」を描き、ドームには「パントクラトル(万物の統治者)のキリスト」を配することによって、メタレヴェルに聖堂空間は「キリスト昇天」の場となる。信徒は聖堂にいながらにして、「昇天」を追体験することが可能である。

この解釈を傍証する作例として、カッパドキアのベリスルマ地区エスキ・バジャ聖堂を挙げることができる。当聖堂の写真は、研究協力者の菅原裕文氏より提供を受けた。これに加えて、平成29年度のダヴィド・ガレジ(ジョージア)調査によって、小礼拝堂アプシスの壁画を発見することができた。



「昇天の礼拝堂」ダヴィド・ガレジ

学界に公表されたことのない本壁画は、アプシスに「オランスの聖母」、その上部に「昇天のキリスト」を配している。アプシスに「昇天」を描く現存唯一の作例で、代表者による聖堂空間解釈を補強してくれる。

発見の今一つは西ジョージア(コルキス)のアチ村にある聖ゲオルギオス聖堂である(13~14世紀)。高価な顔料は用いていないが、銘文は正確なギリシア語で記され、画家はギリシア(ビザンティン)人であった可能性がある。

アプシスにはジョージア聖堂の通例である「デイシス」を配し、西壁には献堂聖者である聖ゲオルギオス伝図像を描く。それ以外は、受胎告知、降誕、神殿奉獻、洗礼、変容、ラザロの蘇生、エルサレム入城、磔刑、冥府降下、昇天、聖霊降臨、聖母の眠りという「十二大祭(ドデカオルトン)」を描いている。「十二大祭」とは12世紀頃のビザンティン世界で確立したもので、キリスト伝のうちから主要な12場面を選び、典礼及び聖堂装飾上の核となす、という宗教上の規範である。



アチ、聖ゲオルギオス聖堂西壁

「聖霊降臨」

興味深いのは、西壁上部を飾る「聖霊降臨」の場面である。上半にメダイヨンの「空の御座」があり、それが聖霊発出の場となる。その下、窓の両側にはベンチに十二使徒が坐している。「聖霊降臨」図像では、通常使徒のベンチは逆U字状に湾曲するが、ドームを飾る場合は円環をなしており、本作例のような直線をなすベンチは類例を見ない。なぜ画家はこのような構図をとったのだろうか。

代表者による仮説は以下となる。アプシスには「デイシス」(キリストに聖母と洗礼者ヨハネがとりなしをする図像)があり、それと本構図中の「空の御座」「ベンチに坐す十二使徒」を合わせて見ると、「最後の審判」を示唆することになる。あえて「聖霊降臨」を定型と異なる構図で描くことによって、画家は聖堂全体にメタレヴェルとしての「最後の審判」を現出してみせたのである。

に挙げた例は、聖堂全体を「昇天」の空間とするものであった。「昇天」は「使徒言行録」(1:11)の天使の言葉「あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる」を待つまでもなく、再臨を強く想起させる図像である。つまり「昇天」

は上方向のベクトルで考えれば「昇天」であるが、それは同時に下方向の「再臨」に等しいのである。に挙げた例は、聖堂を「最後の審判」の空間と見なすものであった。両者ともに、聖堂を終末論的空間と考える点で一致している。

聖堂に「最後の審判」やその他の終末に関わる図像を描く作例は、初期キリスト教以来枚挙に暇がない(ラヴェンナのガッラ・プラチーディア廟等)。しかしビザンティンの聖堂装飾の特異な点は、複数の図像をメタレヴェルで見ることによって、信徒が生ける三次元空間を、そのまま終末の空間に変じさせるところにある。ビザンティン辺境の作例が、私たちにそれを教えてくれるのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計13件)

益田朋幸「聖母マリア伝図像の東西」『西洋中世研究』10号、2018年(招待論文、印刷中)

益田朋幸「パナギア・ペリブレプトス聖堂(オフリド)プロテシスの装飾プログラム」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』63号、2018年、441-57頁

https://www.waseda.jp/flas/glas/assets/uploads/2018/03/Vol63_MASUDA-Tomoyuki_0441-0457.pdf

益田朋幸「パナギア・ペリブレプトス聖堂(オフリド)ナルテクスの装飾プログラム」『Waseda RILAS Journal』5号、2017年、311-28頁

https://www.waseda.jp/flas/rilas/assets/uploads/2017/10/311-328_Tomoyuki-MASUDA.pdf

益田朋幸「コーラ修道院の名称について」『美術史研究』54冊、2016年、31-42頁

益田朋幸「パナギア・ペリブレプトス聖堂(オフリド)ディアコニコンの装飾プログラム」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』62号、2017年、321-33頁

https://www.waseda.jp/flas/glas/assets/uploads/2017/03/2017_masuda_321-333.pdf

益田朋幸「予型論の射程」『聖堂の小宇宙』竹林舎、2016年、23-38頁

益田朋幸「罪から和解、救済へ カッペラ・パラティーナの総合的解釈」『聖堂の小宇宙』竹林舎、2016年、196-202頁

益田朋幸「聖母伝の視覚的予型論」『聖堂の小宇宙』竹林舎、2016年、351-75頁

益田朋幸「「見えない神」のレトリック」『Waseda RILAS Journal』4号、2016年、263-69頁

http://www.waseda.jp/flas/rilas/assets/uploads/2016/10/Rilas04_263-269_Tomoyuki-MASUDA.pdf

益田朋幸「オフリドのパナギア・ペリブレ

プトス聖堂壁画における「三の祝福」」『Waseda RILAS Journal』4号、2016年、153-68頁(査読有)

http://www.waseda.jp/flas/rilas/assets/uploads/2016/10/Rilas04_153-168_Tomoyuki-MASUDA.pdf

益田朋幸「エル・グレコ作サント・ドミンゴ・エル・アンティエグオ修道院祭壇画とクレタの聖堂装飾」『美術史研究』53冊、2015年、47-68頁

益田朋幸「ティモテスバニ修道院(グルジア/ジョージア)と聖堂装飾における復古の問題」甚野尚志・益田朋幸編『ヨーロッパ文化の再生と革新』知泉書館、2016年、353-380頁

益田朋幸「ビザンティン聖堂装飾における「受胎告知」と「神殿奉献」」『Waseda Rilas Journal』2号、2014年、49-50頁(査読有)
<https://www.waseda.jp/flas/rilas/assets/uploads/2015/12/66e3ab416453fbb5279f790c6f60fae3.pdf>

[学会発表](計7件)

益田朋幸「中世ロシアの聖堂装飾におけるビザンティンの寄与」(招待講演)日本ビザンツ学会第16回大会、2018年3月

益田朋幸「東方キリスト教の聖堂と壁画装飾」(招待講演)日本オリエント学会第58回大会、2016年11月

益田朋幸シンポジウム「ビザンティンのカッパドキア」企画及び研究報告「カッパドキア聖堂装飾における「キリストと十二使徒」」美術史学会・日本ビザンツ学会(2016年大会)、2016年3月

益田朋幸「十字架の顕現 初期キリスト教美術からビザンティンの辺境へ」(招待講演)新約聖書図像研究会 2015年12月

益田朋幸シンポジウム「見える神、見えない神 神の不可視性をめぐるレトリック」企画及び研究報告「見えない神のレトリック」美学学会第66回全国大会 2015年10月

益田朋幸「ティモテスバニ修道院とグルジアの聖堂装飾」日本ビザンツ学会大会、2015年3月

益田朋幸「キリストの遍在と三位一体『フィロカリア』と後期ビザンティン美術」(招待講演)上智大学共生学研究会・教父研究会・東方キリスト教学会、2014年6月

[図書](計3件)

甚野尚志・益田朋幸編『ヨーロッパ文化の再生と革新』知泉書館、2016年、全385頁

益田朋幸編『聖堂の小宇宙』(ヨーロッパ中世美術論集4)竹林舎、2016年、全438頁
加藤磨珠枝・益田朋幸『西洋美術の歴史 2 中世 I キリスト教美術の誕生とビザンティン世界』中央公論新社、2016年、全607頁(益田担当 17-22, 241-580, 594-97頁)

[その他]

ホームページ等
ビザンティン聖堂データベース
<http://db2.littera.waseda.jp/wever/byzantine/goLogin.do>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

益田 朋幸 (MASUDA, Tomoyuki)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：70257236

(2) 研究分担者

浅野 和生 (ASANO, Kazuo)
愛知教育大学・教育学部・教授
研究者番号：80167896

(4) 研究協力者

武田 一文 (TAKEDA, Kazufumi) (早稲田大学・文学学術院・助手)
菅原 裕文 (SUGAWARA, Hirofumi) (金沢大学・歴史言語文化学系・准教授)
辻 絵理子 (TSUJI, Eriko) (共立女子大学・聖心女子大学・非常勤講師)